

剛柔流の歴史的経緯

1929年（昭和4年）に明治神宮で行われた"御大礼奉祝全国武道大会"で奉納演武をした宮城長順の高弟・新里仁安が流派名を問われ、帰郷後それを聞いた宮城長順が、自派を「拳之大要八句」の中の「法剛柔吞吐(ほうごうじゅうどんと)」を引用して命名したと言われている。

現在の剛柔流はいくつかの会派に分かれており、東恩納寛量の弟子でもあった比嘉世幸の系統、宮城長順の高弟であった八木明徳の系統、同じく高弟の宮里栄一の系統、宮城長順と比嘉世幸に師事した渡口政吉の系統、それとは別に立命館大学空手部で宮城長順に直接師事し剛玄の名を拝命した山口剛玄を中心とした本土で独自に普及した系統がある。

サンチン（三戦）

「サンチン立ち」に象徴される、剛柔流の背骨とも言える型。「サンチン」とは、立ち方や型のみならず、伸ばす筋肉と曲げる筋肉を同時に働かせる事で任意の関節をロックし、外部からの衝撃に対する耐久力を高める技術全般の事を指す。

テンショウ（転掌）

突きが繰り返し使われるサンチンに対し、殆どが受けの動作で構成されている珍しい型サンチン、転掌は共に単純な動作の型であるが剛柔流の基本思想は辿っていけばここに行き着くと言っても過言ではなく、高段者でも、常にここへ立ち返って確認するほどである。六機手→転換手→転掌と名が変わる。宮城長順の考案(制定)型。

セイユ(エ)ンチン（制引戦・征遠鎮）

かつては「制引戦」と書いてこう読ませたが、戦前・戦時中に、当時の世相を反映して武勇・軍事色の強い表記に改変され、現在に至っている。旧い方の名前が示すとおり、襟や手首などをつかんで引きつけようとする相手を想定した技が多く含まれる。柔の要素が強く、蹴り技が全く存在しないのも大きな特徴である。

セイパイ（十八手）

全日本空手道連盟第一指定形

全ての型の中で最も柔の要素が強く、発祥が南部の黄河流域ではなく、北方や西方の砂漠地帯であるとする説もあり、実際剛柔流に限らず、空手の型としてはかなり異彩を放っている。大抵どんな武術も、その地域の気候や風土に合わせて変化、改良されてゆく

ものであるが、このセイパイは、大陸から伝わったものが、殆ど手を加えられずに原型を留めていると言われる。

中国武術由来の身体技法について

勁力：

沈墜勁(ちんついけい)

纏絲勁(てんしけい)

十字勁(じゅうじけい)

剛柔吞吐：

剛と柔、呼吸

氣沈丹田：

氣を丹田に落とす。

上虚下実：

上体の脱力し下半身をしっかり立つ。

立身中正：

体の正中線をまっすぐに立つ。

沈肩墜肘：

肩の力を抜いてひじを幾分垂らす。

含胸拔背：

胸を合わせるようにし、背を丸くする。

十趾抓地：

足の指で床を掴むように立つ。

収腹促肛：

下腹部を引き込み、同時に肛門をしめる。

松腰松膀：

腰、股の力を抜いて柔らかく立つ。

全身鬆開：

全身の力を抜き、リラックスさせる。

剛柔流の源流、白鶴拳（はっかくけん）について。

発症地：

福建省とその対岸の台湾

修得理念：

技の豊富さではなく、深めていく武術を主眼としている。

時代と創始者：

清朝康熙年間（1662年 - 1722年）

少林寺の僧で少林十八羅漢拳の使い手、方慧石の娘、方七娘によって創作

技術と拳理：

白鶴拳の拳法理論は、**陰陽、三才、五行、八卦**の四つの考えからなる。

- ① 陰陽は心身一体、攻防一体、内外一体といった拳法の理念
- ② 三才は形、功、法のことで、形は拳法の型。功は功夫（修練）、法は技法
- ③ 五行は金形手、木形手、水形手、火形手、土形手といわれる五種類の基本型
- ④ 八卦は、攻守の理論である八誌（吞・吐、浮・沈 と 剛・柔、動・静）